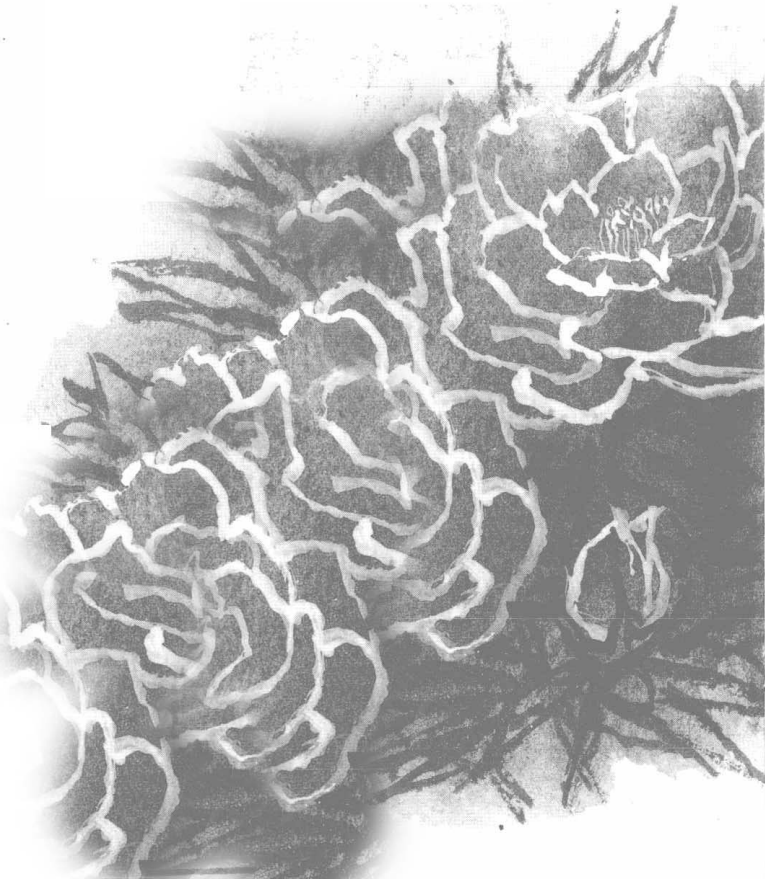
浮雲の剣

古川薫

新潮社

浮雲の剣

古川 薫



浮雲の剣（うきぐもの けん）

著者　古川薫（ふるかわ かおる）

発行　一九九二年一一月一五日

発行者　佐藤亮一

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一番地
株式会社　新潮社

電話　営業〇三（3266）五一一一　編集〇三（3266）五四一一

振替　東京四―八〇八

印刷所　東洋印刷株式会社　製本所　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

© Kaoru Furukawa 1992, Printed in Japan

ISBN4-10-345405-9　C0093

目次

ぐみの実……5
剣と牡丹……31
浮雲の剣……51
秘剣「出撃」……73
奇巌の庭……93
人質櫓……111
遠い海……137
三君怪死……159
大名のセコンド……189
消え行くのみ……209

装画　鴇田幹

題字　古川薫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

浮雲の剣

ぐみの実

一

火ノ見山のふもとにある小さな神社の鳥居前に坐る古びた石の唐獅子の横に、一人の男の子をつれた浪人者が、うっそりとたたずんでいる。

享保十八年（一七三三）、春の昼さがり。

今しがた参拝を済ませたばかりだが、それからどこに行くというあてもない。強いていえば、追っ手に脅えながら一夜の宿を探さなければならなかった。

豊前小倉の港で、長州に帰る漁船と聞いてむりやり頼みこみ、着いたところは日本海に臨む名も知らぬ漁師町だった。そこから海に沿う山陰街道を下関の方向に歩いた。北前船で賑わうその港町へ行けば、何とかなるかもしれない。ことによれば、船賃をかせいで大坂に出てもよい。漠然とそんなことも考えている。

がっしりした長身の肩を怒らせるようにして、肥前浪人・前尾（まえお）清兵衛治兼（はるかね）は、真っすぐに延び

た細い参道に目を投げかけ、押し黙っていた。日に焼けて浅黒く、流浪の旅をつづける不惑を過ぎた男の疲労が、ややもすればにじみ出るが、鼻梁の高い横顔は油断なく引き締まって見える。もともとが無口な性質である。子供の苦痛をまぎらわそうとして、道々話しかけたりはしたが、それもやめてしまった。

十歳になる秀千代は、父親似の聡明な顔をしかめて、さすがに疲れ果てたという表情を正直にあらわしていた。朝からもう十里ばかりも歩きつづけているのだ。

――侍の子は腹が減ったなどと口にしてはならん。

そんなことをずっと教えこまれてきた彼は、空腹にも必死に耐えている様子である。

やわらかい風が吹いていた。参道の尽きるあたりから畠になっていて、午後の陽を浴びながら輝くばかりに咲き乱れる菜の花が、かすかに揺れている。

治兼が姿勢を低くして、前方をながめると、それにならって秀千代も前かがみになり、目をこらした。黄色く波打つ花弁の敷物から浮上するかたちで、薄紫の山影が刷毛ではいたような緩やかな起伏を見せている。

その山の切れ目から、響灘が顔をのぞけている。日本海の深みにつながる静かな蒼い海である。炎えるような黄と昏い海面との対照的な色が、菜の花の凄絶な美しさを描きだしている。それが治兼の目に、何か狂気に似たものを感じさせた。

彼は、そのとき菜の花だけを見ているのではなかった。菜の花畠を掻き分けるようにして海沿いに走る街道を、慌ただしく動きまわる人々の群れに、険しい視線をむけていたのである。

その日の朝、漁師町で財布をはたき、わずかな飯を食べたあと、治兼の懐には一文の銭も残っていなかった。自分は水腹で我慢するとしても、秀千代にだけは食べさせてやりたい。教えを守

ってひとことも空腹を訴えないわが子がいじらしく、どのようにしても飢えを救ってやりたいと思いはじめていた。

——たとい斬りとり強盗をはたらいても。

治兼は、もはやその決心をかためていたのだ。

鍋島藩士だった治兼は、当然のように「葉隠」を読んでいる。有名なこの士道書は、享保元年に鍋島藩の山本常朝という人が完成させ、藩士のほとんどが、どうかすると奇矯ともいえるその哲学に大なり小なり触れていた。

治兼にしても充分に真髄を理解しているというわけではなく、「武士道といふは死ぬことと見つけたり」といった激越な調子の言葉に、何となく引き込まれていく気分を味わっているというほどのものであった。

しかしその内容は、かならずしも武士のいさぎよい生き方のみを教えるものではなかった。見苦しく取り乱した話も紹介されており、武士も人間であることを寛容にながめるといった筆づかいも感じられたのは意外だったが、それはむしろ治兼を勇気づけたりもした。全面的にきびしい倫理観を説く山鹿素行の「武教小学」などとはかなりおもむきが違っている。

ある侍が生活に困り蔵の米を盗んだ。死罪に決まったとき「そのほうは狂歌を詠むと聞いたが、この場でも詠むか」とたずねられて、

ほのぼのとあかしかねたる世の中に
しまがくれざる米ほしぞおもふ

と詠んで罪を許されたという話も語られている。彼は鍋島志摩の家臣で「ほのぼのと明石の浦のあさぎりに島がくれ行く舟をしぞ思ふ」という古今和歌集の歌をもじった機知が称えられたの

だった。
米がないと妻が嘆くのを聞いて、藩に年貢米を納めに行く途中の百姓を刀でおどし、自分の家に運びこませた侍が死罪を許されたという話も、この書の「聞書（ききがき）」に出てくる。
「切羽つまったときは、斬りとり強盗をするもやむを得ない」とはっきり教えたのは、「葉隠」と並ぶ武士道書として知られる「武道初心集」である。戦国の遺風がまだ消え去っていないころ書かれたので、武士の世界にただよっていた殺伐な気風が反映している。
生活に追いつめられた浪人前尾治兼にとっては、昔も今もない。わが子のために食べ物を強奪しようと決意するのは、ごく自然の成り行きだった。
「そなた、動かずにここで待っておれ」
いい残して、治兼は少しばかり下り道になった参道を駆けおり、菜の花畠を横切って、まばらに民家の並ぶ街道筋に近づいて行った。

二

そこまで来て治兼は、先程からの人の動きが、ただならぬ気配を帯びていることを知った。
農民と思われる男たちが手に手に鍬などを持ち、なかには竹槍をかついでいる者もいる。
――一揆か。
打ち壊しの騒ぎにまぎれて、目的を達することもできると、とっさに思った。
「何ごとか」
道に出ると、出会いがしらの一人を呼びとめて治兼はたずねた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「海賊だア」
と、男はわめきながら走り去る。治兼は首をひねった。こんな世に海賊とは妙なことだと思いながら、とにかく男たちが急ぐ方向に足をはこんだ。
しばらく行って街道から小道に折れ、海辺に出る。砂浜に降りる段丘の草むらに数十人の農民が武器を手に立ち、波打ちぎわにいる浪人風の男たちとにらみあっていた。
漁船二艘が磯に漕ぎ着けられており、それに乗ってきたらしい蓬髪の凶暴な顔つきをした男十人ばかりが抜刀して、しきりに威嚇しているところだった。そのそばには斬り捨てられた農民の死体が一つ、波にあらわれていた。
「まさに海賊だな」
思わず治兼がつぶやくと、そこにいた農民たちが一斉に振り向いた。
「あんたはだれだ」
ひとりが甲高い声をあげ、竹槍を構えた。
「早まるでない。拙者は彼らの仲間ではありません」
治兼は笑いながら、その男の槍先を手で払いのけた。
「手伝って下さるのかね」
白髪の老人が、おだやかにたずねた。その落ち着きぶりから見ると、村の長老でもあるのだろう。
「事情によっては、相談にのってもよい」
「このあたりの漁村を荒らしまわっている者どもです。米十俵よこさなければ、村を焼き払うというております。去年の冬は隣村が焼かれました。そんな米があるわけもない」

「藩の役人はどうしているのです」
「今、呼びに行っておりますが、城下まで二里近くもありますから、お役人が到着するまで一刻以上はかかるでしょう。やつらは船で逃げるので、捕まえることができないのです」
老人がそう説明している間にも、いきりたった悪人たちは口々にわめいている。
「いつまで待たせるのだ」
と、すぐにでも押し出してくる構えを見せはじめた。
「もう少し待ってもらわんと……」
役人が来るまでの時間をかせごうというのだろう。最前列にいる農民のひとりが、哀願するように叫んだ。
「任せていただこうか」
治兼がこともなげにいった。
「手ごわいですぞ。腕っぷしの強い者がかかっていきましたが、あの通りやられて、もうだれも手向かう勇気をくじかれておりますから、一緒に戦うというわけにはまいりません」
「しかし、これだけの人数がそろっているのだ。戦う気勢くらいは後ろで示して下さらんか」
「ご奇特なお志ありがとうございますが、無駄死になさいますな。お役人を待ちましょう。いざとなれば、少しばかりの米なら渡してもよいと思うとります」
「それは拙者が彼らの手で打ち果たされてからでも遅くはあるまい。ここを通りかかったのも何かの縁だ。とにかくやってみましょう」
「さほどいわれるのでしたら」
「その前に頼みがある。腹が減っては戦さができんと申しますでな。腹ごしらえしたい。何ぞ、

食べ物はありませんか」
老人は苦笑しながら、そばにいる者に命じて、付近の家から麦飯のむすびを三つとりよせた。空腹のあまり死を承知の仕事にありつこうとする食いつめ浪人の心情を哀れとも思ったのだろう。
「それを食べられましたら、ここを立ち去られてもよし、われわれと一緒に成り行きを見守られるもよい。好きになされませ」
「思いちがいされては困るが、ただもうひとつお願いがあります。そこの氏神の境内に男の子がひとり拙者を待っておりますので、済まぬがこのむすびを届けてやってくれませんか」
と、治兼は自分が一個だけ食べた残りの二つを差し出していった。
それを聞いて、老人はにわかに目をうるませた。
「これは心ないことを申しあげました。そのお子には別に食べ物を届けさせましょう。あとの面倒もわたくしに見させていただきます。あなたさまは、とにかくそれをお上がり下さい」
「かたじけない」
治兼はゆっくり腹を満たすと、竹筒で出された水を一口飲み、ふたたび口にふくんだ水で、刀の目釘をしめらせた。袴の股立ちをとり、刀の下げ緒をはずして、手早くたすきがけして浜へおりて行った。
「おのれは何者だ」
首領と見える浪人が怒鳴った。
「おぬしらとご同業といいたいが、まだそこまでは行っておらぬ。斬りとり強盗は武士のならいとか。同じ境涯なれば、わからぬでもない。したが黙って通り過ぎることもならんのでな。これも拙者にとっては身すぎのためだ。悪く思わんでくれ」

「しおらしいことをぬかす」
首領がせせら笑った。
「実は拙者、にぎり飯三つで、海賊退治に雇われたのだが、ここで血を流したくはない。このまま引き揚げてくれんか」
「志の低い奴。どうだ俺たちの仲間にならぬか。ちっとはましな暮らしもできようというものだぜ」
「おぬしらどこから来たか知らぬが、このような荒稼ぎをしておると、いずれ身のおきどころもなくなり、ましな暮らしなど望めなくなろうぞ」
「つべこべぬかすな。おい、こいつを片づけてしまえ」
首領が顎をしゃくった。三人の手下がいきなり抜刀しながら襲ってくる。同時に治兼は砂を蹴って右に走ると見せて、急に立ち止まり、追ってきた最初の男が大上段にふりかぶるところを、身を屈め体当たりするようにして胴を払った。つづいて次の奴が斬りかかる刀を擦りあげた勢いで、そのまま激しく振りおろすと、右肩からの袈裟がけが深々と決まっていた。
またたくうちに二人をたおし、逃げて行く三人目の男を追って、背中に一刀を浴びせかける。乾いた砂が鮮血を吸い取り、浜辺はたちまち修羅場と化した。
「ぬかるな、やっつけてしまえ」
こんどは首領が先頭になり、治兼を襲ってきた。手並みを恐れてすぐには跳びこんでこない。遠巻きにしてしきりに野太い声を発するばかりである。いつか治兼は小刀を左手に抜いてその剣尖を下げ、右手の大刀を肩でかつぐという不思議な構えを見せて、じっと立っている。
後ろにまわった一人が、隙をねらうつもりで治兼の背中に突きをいれてきた。瞬間、治兼の体

がくるりと半回転し、小刀で払うと同時に大刀がうなりをあげて、その者の顔面を一撃した。そこで包囲をのがれ、磯伝いに走って海を背に構えなおし、農民たちに向かって叫んだ。
「船を、船を沖に流してしまえ」
「わあー」と声をあげながら、彼らが浜に駆けおりて行く。
退路を失うとわかった浪人たちが、慌ててそのほうに向きを変えようとしたところを治兼が突進して、二人を斬りたおし、さらに進んで一人を仕留めた。残る首領をふくめた三人は農民たちに襲いかかり、追いちらして早くも船に乗りこんでいる。そのまま逃げるつもりであろう。
治兼はジャブジャブと海に入って行き、櫓を漕いでいる男をめがけて力一杯に小刀を投げた。それはきらめきながら浅い弧をえがいて宙を流れ、吸い寄せられたように、毛深い男の胸を刺しつらぬいた。
そのころになると農民たちも大勢で海に入ってきた。臆病に縮こまっていた彼らも、ようやく怒りが噴き上げてきたのだろう。てんでに鍬の先をふなべりにひっかけて揺さぶり、ついには転覆させて、海中に落ちた二人の賊を、その場でなぶり殺しにしてしまった。
――斬りとり強盗もうかつにはできないものだ。
治兼が濡れた袴の裾をしぼっていると、くだんの長老が近づいてきて丁重に礼を述べ、お宮で待っていたお子も迎えにやったので間もなくここへ来られるだろうという。
「ところで、これからどこへ行きなさるおつもりですか」
と問われて、治兼は正直にあてのない旅であることを話した。
「失礼ながら、武家に生まれられたからには、学問もおやりでしょう」
「まあ四書五経の素読ぐらいは済ませております」

「ではお願いがございます。この村には寺子屋というものがなく、かねてからだれぞ師匠としてここに居ついて下さる方はおられまいかと、さがしておりました。いかがでしょう、しばらくこの村に腰を落ち着けるお気持にはなれませぬか」
「それは願ってもないことです」
自分たち父子に決定的な悲劇を招くことになるという不吉な予感など、むろんあろうはずもなく、治兼は目を輝かせて承諾した。

三

火ノ見山のふもとにある氏神のすぐ近くで廃屋になっていた農家を修復し、治兼父子の住居を兼ねた粗末な寺子屋が出来上がるまで半月とはかからなかった。
村人たちは実に協力的だった。全滅させたもののまだ海賊の仲間がどこかにいないとはかぎらず、いつ仕返しにやってくるかしれないという恐怖もある。用心棒としても治兼は村に必要な人間だった。
寺子屋には、いつも二十人ばかりの子供たちがやってきて賑わった。ときには剣術を教えてもらいたいという若者がやってくる。いずれもわずかな礼金だが、親子してかつがつ食べて行けるのなら不満はない。
はやくも二カ月が過ぎ、五月に入っていた。
「きょうも雨が降りそうにありませんね」
と、晴れわたった空を仰いで、秀千代が父親にいう。抜けるような青空を背景にした火ノ見山

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com